

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.26-1 (通巻 74 号) 2018.8.3 発行



カメラ Nikon
P1 スポット ミュージアムの收藏品 71 に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの收藏品 71	カメラ Nikon -ベトナム戦争取材した石川文洋氏のカメラ-
02	巻頭つれづれ	ミス・アメリカ・コンテストと核兵器
04	着任挨拶	
05	平和教育研究	映画上映会&スライドトーク 『奪われた村 避難 5 年目の飯館村民』
06		映画上映会&ゲスト対談 『憲法を武器として -恵庭事件 知られざる 50 年目の真実』
07	運営委員リレー連載	グローバル・タックスの導入実現に向けて
09	ミュージアムおすすめの一冊	『イスラームってなに？ シリーズ3 イスラームとせかい』
11	事業報告	

カメラ Nikon

ーベトナム戦争を取材した石川文洋氏のカメラー

写真家の石川文洋氏は、1965年1月から68年12月までの4年間ベトナムに滞在し、ベトナム戦争¹の戦場やベトナムの人々を撮影しました。このカメラは、この間に石川氏が使っていたニコンF4台のうちの1台です²。

ニュース映画制作をしていた石川氏は、二十代半ばで仕事をやめて世界一周を目指し、途中の香港でカメラマンの助手となりました。トンキン湾事件の取材に同行してベトナムを訪れた際に風土や人々の魅力、世界中から集まるジャーナリストや、最前線基地での取材に刺激され、フリーで取材を続けることになったといいます。最初に南ベトナム政府軍の海兵隊を長期取材しましたが、これが放送中止となったことで、一人でも撮影できるスチールカメラに変更しました³。はじめに中古のライカを購入し、その後ベトナムの下宿先の主人がニコンFを贈ってくれたことで、ライカM2とニコンFが石川氏のベトナム戦争取材のカメラとなりました。

上部についた三角形のファインダーが特徴的なニコンFは、1959年に発売が開始されるとプロ用一眼レフカメラとして報道、広告、戦場とあらゆる分野のカメラマンに愛用されました。これは1966年から67年製造のものです。ブラック仕上げの底部や裏面には使い込まれて真鍮部が見えているところもあります。裏面の上のほうには、青地に白文字のダイモテープでBUNYO ISHIKAWAと貼られています。カメラ本体だけで重さは700グラム以上ありますが、ここに主に105ミリと200ミリの望遠レンズを付け替えて使っていました。

石川氏の著書『戦場カメラマン』には従軍取材時の荷物についての記述があり、カメラを持ち、兵士とともに戦場で生活し、撮影をしていた様子が伺われます⁴。

カメラバック	1個
ライカM2	2台
	ズマリット F2.8 35ミリの広角レンズ
ニコンF	2台
	ニッコール F2.8 35ミリ
	ニッコール F2.5 105ミリ
	ニッコール F4 200ミリ
フィルム	トライ X30本、エクタクロームエ X20本
	セコニックススタジオマスター露出計
リュック	(南ベトナム政府軍使用のもの、背中に鉄の枠がついている)
水筒	2個(プラスチック製)
ポンチョ	2枚(米軍のカッパ、野営する時に1枚はテントにして、1枚は地面に敷く)
ライナー	1枚(軽量寝具で、野営の時くるまって眠る)
衣類	靴下、替え用にシャツ、パンツ各1枚
洗面道具	(カミソリ、石けん、歯ブラシ、練り歯磨)
薬	フロプキン(マラリアにかかっていたので発熱予防の薬)、正露丸、にごった水を飲むときに使用する薬、蚊よけのため皮膚にぬる液体

食糧(現地で手に入れるので、肉の缶詰を非常食に少量持つだけで沢山は持たない)

その他 英文和訳、和文英訳の一緒になった研究社発行の辞書、ベトナム全体の200分の一の地図、南ベトナム政府、米軍、日本大使館発行の記者証、それに東京から送ってもらったノーマン・メイラーの『裸者と死者』の文庫本



取材中の石川文洋氏

今回、資料の寄贈に当たりお話を伺った際、石川氏はこうした戦場での取材について、以下の様にお話下さいました。

「撮影していた私はファインダーを覗いて、ずっと撮影しているから、考える時間はありません。もうずっと弾は飛んでくるし、殺したり、切ったりしているからね。だから、後から考えると、そういったものが戦争の現実なんだと・・・戦争というのは殺し合いであると。民間人が犠牲になる、それから個人や公共の財産が破壊される・・・それから自然も破壊されます・・・それから文化財が破壊される。これはもうどの戦争でも同じですよ。私のふるさとのお沖繩もそうです。」

(学芸員 兼清順子)



裏蓋側(縦6.5cm 横16.5cm 高さ8.8cm)

¹ 第二次世界大戦後に旧宗主国フランスや旧日本軍から独立したベトナムは、資本主義陣営が支持する南ベトナムと社会主義国家が支持する北ベトナムに分裂し、介入を伴う武力紛争状態に陥りました。アメリカは、1964年のトンキン湾事件で介入を深め、翌年には北ベトナムへの大規模な爆撃をはじめ、最高時には約56万人の兵をベトナムに送りました。

² 4台のうち2台は壊れたとのこと。

³ 「南ベトナム海兵大隊戦記」は、1965年5月9日に日本テレビの「ノンフィクション劇場」で放送されましたが、南ベトナム政府に批判的、海兵大隊が容疑者の首を切るシーンがあるとの問題で、再放送と続編放映が中止となりました。

⁴ 石川文洋『戦場カメラマン』朝日文庫 pp164-5

巻頭 つれづれ

ミス・アメリカ・コンテストと核兵器

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

「人間の価値展」のこと

古い話ですが、1993年にドイツ連邦医師会、ベルリン医師会および京都ドイツ文化センターと共催した「人間の価値展」はとても印象深いものでした。もともと京都大学の故・林功三さん（ドイツ文化・社会史）が提起された企画です。

この展示会は、第一次大戦終結（1918年）から第二次大戦終結（1945年）までの間、ドイツの医学者たちが関わった人体実験の実態を赤裸々に暴いた内容で、後半には日本の731部隊による人体実験にも触れています。ベルリン医師会がつくったパネルは、「戦時、ドイツの医師は公認の殺人者だった」で始まりましたので、731部隊による人体実験という戦時体験をもつ日本の医学界にとってはかなりナーバスな内容でした。京都大学での開催見通しを描き切れなかった林先生は、開設されて間もない当ミュージアムに可能性を託し、結局、「人間の価値展」として結実させました。

「人間の価値」という言葉は、2つの内容を含意しています。1つは文字通り「人間の値打ち（value）」という意味ですが、加えて「人間の値段（price）」という意味も含まれています。これは、人体実験のために人間の臓器が売り買いされた非人道的な事情を表すためでした。過去と誠実に向き合おうとしたドイツの医学界の姿勢が光った展示会でした。

ミス・アメリカ・コンテスト

最近、「人間の価値」に関わってちょっと気になる報道に出会いました。ミス・アメリカ・コンテストの審査基準変更のニュースです。

人間は、さまざまな能力や資質に特別な「優劣の尺度」を導入し、コンテストを設定して競いあってきました。競いあう分野は多種多様で、オリンピックは「速く、高く、遠く、強く、正確に、美しく」などを競いあうスポーツ分野の一形態に

過ぎず、およそ人間活動のあらゆる分野にわたって「優劣の尺度」が設定され、国や民族をこえたコンテストが行われてきました。運動能力については「公平性」への配慮から性や年齢や障害の有無、体重などでグループ化されたりしますが、通常、ノーベル賞のような科学・文化活動の分野にはそうした区別はありません。しかし、「優劣の尺度」がいつも「100%客観的」とは限らず、何をもって優れていると判定するのか、その価値判断の尺度をめぐって批判や論争が起こったりしますし、時には、そうしたコンテストの正当性自体が根底から問い直されたりします。最近話題になったミス・アメリカ・コンテストの審査方針の変更も、そうした例の1つと言えるでしょう。

2018年6月5日、ミス・アメリカ機構理事長のグレッチェン・カールソンさんは、テレビ番組の中で「私たちはもはや〈見世物〉ではなく、〈競技会〉です。身体的外見で候補者を判定することはもうしません」と発表、水着やイブニング・ガウンでの審査を廃止する方針を示しました。カールソンさん自身も1989年のミス・アメリカでしたが、確かに「均整のとれた若い女性たちのビキニ・スタイル」はこのコンテストの呼び物の1つだったのでしょうか。しかし一方では論争含みでもあり、例えば1951年にミス・アメリカに選ばれたヨランダ・ベベゼさんは、大会スポンサーから提供された水着でポーズをとることを拒んだために水着メーカーがスポンサーから撤退し、新たに「ミスUSA」と「ミス・ユニバース」を立ち上げるという「事件」もありました。ミス・ユニバースの選考基準も単に外見上の美しさだけでなく、知性・感性・人間性・誠実さ・自信などの内面に関する審査も重視され、社会貢献への積極性、スピーチ力、国際交流の資質など総合的に判断されるとされていますが、今回のミス・アメリカの審査方針の転換が何らかの影響を及ぼすかもしれません。もちろん、こうしたイベントには、バレンタイン・チョコの場合と同様、サポート企業の思惑が重なっている面は否めないでしょう。

ところで、ミス・アメリカ・コンテストの方針転換の発表を受けて、2018年のミス・アメリカのカーラ・マントさんが早速エールを送りました。自身のツイッターに「#byebyebikini」（バイバイビキニ）というハッシュタグ付きで、黒い背景に浮

かぶ白いビキニがパッと消える動画を投稿し、「私たちは水着から新しい時代が変わろうとしているの」とコメントしたのです。

多少とも核問題に関わってきた者の悲しい性と言うべきでしょうか、私はこのニュースを知ってちょっと複雑な思いに囚われました。

byebyebikini ? —ビキニを忘れないで

そもそも「ビキニ・スタイル」という水着の名前は、アメリカの戦後初の原爆実験に由来するものです。

アメリカによる人類初の原爆実験は、1945年7月16日にニューメキシコ州アラモゴードで行われた「トリニティ実験」です。3週間後の8月6日広島にウラン原爆が、その3日後の8月9日長崎にプルトニウム原爆が投下され、35万人をこえる人々の命を奪っただけでなく、今日まで続く被爆者やその子孫の苦しみの原因となりました。

そして、戦後支配をめぐる米ソの対決がエスカレートする中で、第二次大戦後初のアメリカの原爆実験が、終戦翌年の1946年7月1日、中部太平洋の島ビキニ環礁で行われました。エイブル実験と呼ばれたこの原爆は長崎原爆とほぼ同じ威力で、高度158メートルで炸裂して凄まじいキノコ雲を湧き立たせました。広島・長崎原爆の影響はできるだけ覆い隠そうとしたアメリカでしたが、エイブル実験はアメリカが獲得した核軍力物の凄さを印象づけるため、世界中に報道されました。



1946年7月1日のエイブル実験

実験直後の7月5日、フランスのルイ・レアールが「世界一小さい水着」をデザインし、「その小ささと周囲に与える破壊的威力」を原爆実験になぞらえ、「ビキニ (bikini)」と名づけて発表しました。レアールは自動車エンジニアでしたが、母親が下着会社を営んでいた関係でこの水着を手がけました。同じころ、同じフランスのジャック・エイムも類似の水着を発表し、「アトム (Atome、原子の意)」と名づけました。何やら共通しています。アトムの語源はギリシャ語の“ $\alpha + \tau\omicron\mu\omicron\varsigma$ ”で、“ α ” (=a) は否定の接頭詞、“ $\tau\omicron\mu\omicron\varsigma$ ” (=tomos) は「切る」という意味なので、全体として「これ以上細分化できな

い」という意味に由来します。

私は「ビキニ」の語源を知ったとき、「面白半分ですぐに無配慮なことをしたなあ」と感じました。ビキニ環礁はやがて核実験場と化し、日本のマグロ漁船第五福丸が犠牲になった1954年3月1日の水爆実験「ブラボー爆発」も含めて、1958年までの13年間に23回の核実験が行われました。その間、ビキニ環礁の人々はロンゲリック島→キリ島と強制移住させられ、いまだにビキニ島に戻れない状態が続いています。1979年にジャーナリストの前田哲男さんが『棄民の群島—ミクロネシア被爆民の記録』(時事通信社)を出版して広く知られるようになりましたが、ビキニ環礁はまさに核軍備競争の犠牲にされた島に外ならず、2010年、核兵器の恐ろしさを伝える「負の遺産」として(広島の原爆ドームと同様)「世界文化遺産」に登録されました。

故郷の島の名前が「核兵器威力の象徴」として面白半分に水着の名前に使われることは、現地の人々にとってどのような気持ちでしょうか?仮にその水着の名前が「ビキニ」ではなくて「ヒロシマ」ならどうでしょうか?

#byebyebikini (さいならビキニ) というハッシュタグをツイッターで発信したカーラ・マントさんにはまったく悪気はないと思いますが、この水着の語源にまつわる歴史的事情を知る者には、核実験場としてさんざん弄んできたビキニ環礁を「バイバイ」の一言で意識から消去するような軽薄さを感じられないでもなく、何だか心地悪さを感じるのです。 “bikini” という言葉をあえて使わず、多少の訴求力の減殺を覚悟してもせめて “byebyeswimsuit” ぐらいに出来なかったのか。ミス・アメリカ・コンテストでは、自国の負の歴史にもそれなりの目を向けるような社会的素養も問われて欲しいなあ、多少お門違いの「ないものねだり」をしている私です。

着任挨拶



吾郷眞一

(国際平和ミュージアム館長 / 衣笠総合研究機構教授)

4月に館長に就任しました吾郷眞一と申します。どうぞよろしくお祈りいたします。

私の専門は国際法で、半世紀近く勉強を続けています。そのきっかけとなったのは高校時代に訪れた広島平和記念資料館でした。その意味で、当ミュージアムのような存在が大変重要だということは、誰よりもよく分かっています。高校生までで学校で勉強する歴史は、日本史も世界史も、あたかも戦争の歴史であるかのようでしたので、そこに広島での衝撃が加わって、少年ながらも戦争と平和について考えてみたいと思うようになったのは自然の流れでした。大学に入ると、ヘルメットをかぶらなければ石がいつ飛んで来るか分からないような危ない、いわゆる学園紛争という私にとっての小戦争を体験し、卒業後もそのまま国際法を専攻する学徒となりました。

大学院生時代に、旅先のデルフトで『戦争と平和の法』で有名な、国際法の父と呼ばれるグロチウス像を見に行ったところ、誕生日が私と同じであることに気づきなにやら楽しかった思い出があります。偶然とはいえ、立命館に来る前に20年近く勤めた九州大学法学部に、世界に数冊しかないそのグロチウスの『戦争と平和の法』初版本が貴重本として所蔵されていたこと、機会があって80年代に10年間職員とした勤めた国際労働機関（ILO）が、ベルサイユ平和条約で国際連盟と同時に設立され、その憲章前文に、「世界の永続する平和は、社会正義を基礎としてのみ確立することができるから」という文章で書き出しがなされていること、そのベルサイユ平和会議に立命館の学祖である西園寺公望が参加し、ロンドンにある帝国戦争博物館所蔵の絵画にしっかり描かれていること、など単なるたわいもない偶然であるにせよ、平和ミュージアム館長に今度就任するに当たり何かの縁を感じるものです。

縁とばかり言えないのが、本ミュージアムの展示姿勢です。通常の戦争・平和博物館と違って、戦争を客観的に眺め（被害者、加害者両方の目で見えていく）、平和を創造するには、単に紛争の原因を取り除くだけでは足りず、飢えや貧

困、人権抑圧や環境破壊など人類が共同して解決すべき問題があるということを示しているのが、本ミュージアムの特徴です。これは、私の国際法研究と同じ方向性を有し、いわば研究の実質的延長とも言えるのです。

「戦争が国際機構を生む」（最上敏樹『国際機構論』）などと言われることがあります。古くはウェストファリア条約による仕組みから、最近では国際連盟、国際連合に至るまで、悲惨な戦争を経験して、その直接的な結果として厭戦機運の中から平和機構ができるものです。従来戦争・平和博物館も、厭戦気分を醸し出すことが目的だと言えるのではないのでしょうか。ところが、当ミュージアムはそれだけではありません。国際連盟規約から国際連合憲章が変わるとき、もう一つの平和への条件、経済社会文化協力の重要性が機構的（憲章9-10章）に導入され、従来型の平和機構を前進させたことと軌を一にしています。すなわち、平和の基礎は単に銃弾が飛び交うことがない状態を保持する、ということだけでなく、経済社会的国際協力が土台を築くのだという信念のもと、国連は安全保障理事会だけでなく経済社会理事会も設けて平和を創造しようとしたのです。本ミュージアムの展示理念も同じ発想を持ち、展示方法には「平和創造」にも重点が置かれているのです。この姿勢は、上で引用しましたILO憲章の発想にも通じ、現在世界レベルで推進されているSDGs（持続可能な開発目標）が意図するところとも同じです。

大学に設置された平和博物館という特殊性を生かし、学際的な知の上に立ったミュージアムを発展させていくことができたらと思います。



ウィリアム・オーペン作ベルサイユ平和会議

平和教育研究センター主催企画

2017年度 映画上映会 & スライドトーク

『奪われた村 避難5年目の飯館村民』

日 時：2018年3月10日（土）14:00～16:30

登壇者：豊田直己氏（フォトジャーナリスト）

映画『奪われた村 避難5年目の飯館村民』（監督 豊田直己／2016年／64分）は、2011年3月11日の東日本大震災に付随して起きた福島第一原子力発電所の事故発生から5年を経た福島県飯館村を取材したドキュメンタリー作品です。作品の舞台となった飯館村は原発事故により計画的避難区域に指定され、多くの村民が避難しました。2017年3月31日に環境省の除染実施計画に基づく除染等の措置が完了したことを理由に避難指示が解除されましたが、ほとんどの住民は避難先での生活を続けています。なぜなら帰りたくても安心して帰ることが出来ないからです。

作品には、避難から数年ぶりに村を訪れる人、一緒に避難できない愛犬に食事を与えるために村へ入る人、避難区域に指定された翌日に自殺した家族のために電力会社と闘う人、長期化する仮設住宅での暮らしの不安を語る人、これから村で頑張ろうとしていた若者など、それぞれがどのように震災と原発事故に向き合い、どのような思いで暮らしているのか、一人ひとりの証言が記録されています。原発事故が笑顔あふれ緑豊かな美しい村から奪ったものは土、植物、家族、祭など村のすべてで、それは今もなお奪われ続けていることを忘れてはいけないと伝えていました。

上映に続いて行われた豊田直己氏によるスライドトークでは、事故直後から現場に入り、今も継続して取材をしているフォトジャーナリストの視点から、住民が避難した後の村の様



豊田直己氏



会場の様子

子や除染作業風景、避難先での住民の生活などをお話いただきました。豊田氏は、事故発生から7年という月日が私たちの中の当事者意識を薄れさせてしまっているのではないかと、「復興」とは果たして何を意味しているのか、仮設住宅が取り壊された後の村民の不安、今後も続く除染作業員の被爆など、私たちには考えるべき問題が多くあることを訴えていました。

上映会を通じて、原発事故発生直後から現在まで、福島の現状を粘り強く伝え続ける豊田氏の思いをうけて、改めて福島と原発事故について知り、平和な社会の構築のために何が必要かをそれぞれが考える良い機会となりました。

当日は震災が起きた3月11日の前日ということもあり、70名近い方々の参加がありました。

—参加者の感想—

知らないことがたくさんあって、自分は知ろうとしていたつもりでも知ろうとしてなかったかとも思いました。貴重なお話を伺えてよかったです。本当にありがとうございました。

（30代 会社員）

とても良い内容でした。これからもこのような企画（福島他）を続けて下さい。豊田さんの健康は大丈夫なのでしょうか？大事にしてこれからも重要なお仕事をなさって下さい。私も小さな小さなできることを続けていきたいと思えます。

（50代 本学教職員）

豊田監督の怒りのエネルギーを感じました。福島県の民の（奪われた生活や過去や未来に対する）声を代弁されていると感じました。当事者意識を欠いてしまうのは、仕方ない面があるので（経験せずに当事者意識を持ってない）、税金の使い方の実態が国民にオープンになれば、もっと社会の在り方を市民ひとりが考えられるのかなと思いました。

（30代 会社員）

平和教育研究

平和教育研究センター主催企画

2018年度 映画上映会 & ゲスト対談

『憲法を武器として — 恵庭事件 知られざる 50年目の真実』

日時：2018年5月2日（水）14：30～20：30

登壇者：稲塚秀孝氏（映画監督、株式会社タキオンジャパン）

内藤功氏（弁護士、日本平和委員会代表理事）

司会：君島東彦氏（本学国際関係学部教授）

後援：京都平和委員会

映画『憲法を武器として— 恵庭事件 知られざる 50年目の真実』（監督 稲塚秀孝／2017年／110分）は、1962年12月、北海道恵庭にある陸上自衛隊・島松演習場の通信線を切断した野崎牧場の兄弟が、自衛隊法121条に違反すると起訴された「恵庭裁判」を現在の視点で描いた作品です。本作は自衛隊が違憲か合憲かが争点となり注目された裁判を、判決から50年を経た今改めて掘り起こし、再現ドラマ（法廷劇）に当時を知る関係者のインタビューをまじえて製作されました。

上映にあわせて行われたゲスト対談では、まず稲塚監督から、1967年の判決を新聞で見た高校生の時、野崎兄弟に話を聞くために恵庭へ行った経験が映画製作のきっかけとなったこと、製作にあたっては関係者へのインタビュー調査や北海道平和委員会に残っていた全公判記録の読解をしたことなど、本作公開に至ったプロセスをお話いただきました。

次に、恵庭裁判をはじめ砂川事件、長沼訴訟など米軍・自衛隊基地関連の裁判への参加歴を持つ内藤弁護士から、弁護団の一員として携わった恵庭裁判の経緯を説明いただきました。結果的に自衛隊の違憲判断を回避した無罪判決となりましたが、野崎兄弟を憲法の力で守ったという意味で価値があり、長沼訴訟につながることを鑑みても、“憲法が国民の暮らしを守る武器であること”を示した裁判であったと当時を振り返りました。

司会の君島教授からは戦後、自衛隊の存在と憲法が問われた最初の事件であったことをふまえた上で、北海道内や全国各地での世論の後押しがどれくらい影響したのか、「肩すかし判決」といわれているが広い文脈では「勝利」だったのか、この裁判以降、憲法学の中では自衛隊の憲法判断は回避するという流れになったといわれているがどう思うか、などの質問をまじえながら進行いただきました。

最後に稲塚監督は「改憲への議論が進む今、事件のことを多くの人に知ってもらうためにこの映画を製作した、本作をもっと広めていきたい」と抱負を語りました。



左から稲塚秀孝監督、内藤功弁護士、君島東彦教授

当日は、憲法記念日5月3日の前日ということもあり、2回の上映あわせて170名近い方々の参加がありました。

上映会をとおして1960年代に起きた恵庭事件とその裁判の経緯を知り、自衛隊基地の存在が隣接して生活する人々にとって身近な暴力であることや、今まさに議論が行われている改憲の争点のひとつとなっている自衛隊と憲法について改めて向き合う機会となりました。

最後になりましたが、本企画の開催にあたって、後援いただきました京都平和委員会の皆さまには多大なご尽力を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。

— 参加者の感想 —

恵庭事件という名前は聞いたことがあったけれど、内容や判決の詳細は全く知りませんでした。私は北海道で育ったため、この事件を知らなければいけないと思い、上映会に参加しました。自衛隊に対する憤りを思うと胸が痛みます。改めて自衛隊が必要かそうでないかを考えるきっかけになりました。

（10代 大学生）

映画の内容が日本国憲法の内容にふれているだけでなく、裁判制度の問題まで掘り下げているように思えました。日本に、勇気ある判決を下された裁判官がおられること、良心に従って生きてこられたことなど、すばらしかったです。（60代 主婦）

安倍首相による改憲がいよいよ現実のものとなってきたこのタイミングで、この映画の製作と上映は大きな意義があったと思います。今は「自衛隊は合憲」という雰囲気は何となく当たり前になってしまっているが、50年前この裁判の時は全くそうではなかったことを改めて思い起こす必要があると思いました。

（60代 無職）

グローバル・タックスの導入実現に向けて

望月 爾

(国際平和ミュージアム運営委員 / 法学部教授)

グローバル化の負の影響の深刻化

近年、グローバル化が急速に進展するなか、国際的な貧困や格差の拡大、地域紛争の深刻化、金融経済の不安定化、地球規模での温暖化や感染症の流行など、グローバル化の負の影響が深刻化しています。こうしたグローバル化の負の影響に対し課税を通じて抑制し、税収を貧困や格差の解消、平和維持、感染症の治療、地球温暖化対策などの国際的な公共財の供給や福祉の推進の財源として再分配する「グローバル・タックス」の導入をめぐる議論が活発化してきています。とくに、最近では国際連帯税として、国際的な枠組みでの航空券連帯税や通貨取引税、金融取引税などについて実現に向けての具体的な議論や取り組みが進みつつあります。

グローバル・タックスとは

グローバル・タックス (Global Tax) とは、グローバルなモノや活動に対して課税を行い、グローバル化の負の影響を抑制しつつ、財源として国際的な公共財の供給や福祉の推進のために支出することにより、地球規模の課題の解決を目的に、税収をグローバルに再分配する税のシステムをいいます。具体的なグローバル・タックスの構想としては、通貨取引税や航空券連帯税のほか、国際炭素税、天然資源税、国際輸送燃料税、多国籍企業税、武器取引税、ビット・タックスなど、さまざまな税が提案されています。

グローバル・タックスの歴史

まずグローバル・タックスの構想の起源は古く、19世紀のスコットランドの国際法学者ジェームズ・ロリマーが自らの著作で「国際政府」の創設や軍縮などのための国際的な財源としての課税の可能性について言及したことに遡ります。20世紀に入っても、第二次大戦後の国際社会や経済の安定化を目的として、マーシャルやケインズ、ミードなどの経済学者たちも同様な国際的な課税の

アイデアをもっていました。

次に、グローバル・タックスの具体化の契機となったのが、1972年にアメリカの経済学者ジェームズ・トービンが初めて国際的な通貨取引に課税するいわゆる「トービン税」を提案したことでした。トービンは、通貨投機による金融の不安定化を抑制し、各国経済に自律性を取り戻すことを目的として、世界的規模ですべての外国為替取引に売り手と買い手双方に1% (その後0.1%)の税率で課税することを提案しました。しかし、このトービンの提案には、国際経済への影響への懸念や技術的な実現可能性の問題があり、その後約20年以上ほとんど顧みられることはありませんでした。

ところが、1996年ドイツのパウル・シュパーンが、トービン税を改良した国際的通貨取引に対する「2層課税」を考案しました。「2層課税」とは、第1層は、為替取引に変動幅を設定しその範囲内の通常の為替取引に対しては低い税率をかけ、第2層は、設定した変動幅を越える取引に対しては高い税率をかけて投機を抑制するというものです。この「2層課税」がアジアの通貨危機の時期とも重なって、1990年代後半トービン税への関心を高め、取引の情報化や集中化も進んだことから導入実現に向けた各国議会やNGOの動きにつながっていきました。

グローバル・タックスから国際連帯税構想へ

2000年9月、国連ミレニアム・サミットが開催され、2015年までに世界の貧困を半減するというMDGs (ミレニアム開発目標) が採択され、国際社会における重要な公約となりました。これを受けてその財源確保のための新たな資金調達方法が議論されました。2002年3月には、メキシコのモンテレイで国連の開発資金に関する国際会議が開催され、国際的にもトービン税や国際炭素税などが再び注目を集めはじめました。それ以降、グローバル・タックスの導入に向けた議論や取り組みは、新たな開発資金の調達を目的とする国際連帯税構想として進展していくことになりました。

国際連帯税とは、2005年1月に開催された世界経済フォーラム (ダボス会議) において、当時のフランスのシラク大統領が打ち出した国際的な課税の構想のことです。具体的には、租税回避目的の資金移動への課税や金融取引税、航空券連帯税、航空・海上輸送燃料税などの導入、なかでも、すでに一部の国で導入されている航空券連帯税と現在EUで導入が検討されている金融取引税の重要度が高いといえます。

航空券連帯税の導入と UNITAID の創設

2006年7月フランスは、途上国に広がる HIV/エイズ、マラリア、結核など感染症の治療薬の提供の財源として国内線・国際線を問わず、航空券へ一定の税額を課す航空券連帯税を導入しました。チリ、ブラジル、韓国など現在10カ国が同様な航空券連帯税を実施しています。フランスの航空券連帯税は、片道ベース（1航空券）ごとに、トランジットの場合を除き、国内線・EU域内への航空券は、エコノミー：1ユーロ、ビジネス・ファースト：4ユーロが課税され、国際線・EU域外への航空券は、エコノミー：10ユーロ、ビジネス・ファースト：40ユーロが課税されています。その年間約1.7億ユーロの税収のほとんどは、国際的な感染症対策のための医薬品購入・提供機関である UNITAID などに拠出されています。

UNITAID は、2006年9月の国連総会において創設された国際的な医薬品支援のための機関であり、その目的は、HIV/エイズ、マラリア、結核などの感染症の治療薬を大量に購入し、より安価なジェネリック医薬品を購入することで低価格化を促進し、途上国の感染者に、より安く大量な医薬品を供給することにあります。具体的な医薬品支援として93カ国約2100万人以上の人々に対し HIV/エイズ、マラリア、結核治療薬の提供などを行ってきました。アジアからは韓国が加盟し、航空券連帯税よりの拠出を行っています。

EU における金融取引税の導入

2008年のリーマン・ショックによる国際的な金融危機の発生に対し、金融セクターに対する応分の負担と危機回避のコストを自己負担させるべく、EUを中心に金融機関に対する新たな課税の動きが活発化しました。EUでは欧州委員会を中心に金融危機への対応の財源として金融取引税の導入の検討が進められ、2012年5月欧州議会は金融取引税を導入する欧州委員会の提案を承認しました。そして、2013年2月14日欧州委員会は、ドイツ、フランス、スペイン、イタリアをはじめ11カ国が2014年1月から金融取引税を導入する指令案を公表しました。

EUの金融取引税は、デリバティブ取引を含む金融機関による金融商品の取引一般に対して広く課税を行うものです。税率はデリバティブ取引以外の金融取引は0.1%、デリバティブ取引は0.01%が適用されます。その税収は年間約350億ユーロと見積もられています。納税義務者は金融機関であり、金融取引を行う当事者双方に対して課税されます。

しかし、このような金融取引税に対し、イギリスやスウェーデ

ンといった国々や金融業界の強硬な反対などを理由に導入は延期されています。その後も欧州委員会においてドイツやフランスを中心に導入に向けた議論や調整が進められてきましたが、イギリスのEU脱退（Brexit）に代表されるEUの経済や政治状況の不安定化などもあり、いまだに導入には至っていません。

SDGs の達成とグローバル・タックスの導入実現

2015年9月の国連持続可能な開発サミットにおいて、MDGsに代わる新たな指標として、「持続可能な開発目標」（SDGs）が設定されました。SDGsは貧困や不平等の解消、飢餓の撲滅、気候変動対策の具体化、平和で包摂的な社会の実現など17の持続可能な開発のための目標と169のターゲットから構成されています。MDGsが8の目標、21のターゲットであったことと比較すると大きく目標とターゲットが拡大したことになります。そのため財源も途上国全体での取り組みに、年間3.3兆ドル（372兆9000億円）～4.5兆ドル（508兆5000億円）の資金を要すると試算されています。必要な財源規模はMDGsの10倍に増大し、UNCTADの試算によれば、SDGsを達成するに当たり、2015年～2030年に生じる不足額は、およそ年間2.5兆ドル（282兆5000億円）にも及ぶものと見積もられています。

それに対し、さまざまなグローバル・タックスの導入が実現したもとして税収の試算額を合計すると、理論上はこの不足額に相当する2兆4379億ドル（275兆4827億円）の税収が得られることとなります。しかし、グローバル・タックスの導入には、国境を越える活動への課税の根拠や課税権の主体はどこが担うか、導入方法や税収の管理など検討すべき困難な課題も少なくありません。また、国家の課税管轄権を越えてどのように国際的な課税の枠組みを構築するか、課税を正当化するための国際的な合意の形成も必要となります。

そのような中で、平成30年度税制改正において、航空券連帯税と同様に出国時に1000円を航空券や船舶の乗船券に上乘せして課税する「国際観光旅客税」が創設されました。また、本年5月にアルゼンチンのブエノスアイレスで開催されたG20外相会合において河野太郎外相は、来年日本で開催される同会合に向けてSDGs達成に必要な資金を確保するため国際連帯税の導入の提案を行っています。今こそ、SDGs達成のためその財源として日本でも国際連帯税をはじめグローバル・タックスの導入実現に向けて、さらなる議論や取り組みを進めていくべきだと思います。

『イスラームってなに？ シリーズ3 イスラームとせかい』

勝沼聡 著

長沢栄治 監修

かがわ出版 2017年



「イスラームって暴力を容認してるんですよね」、「イスラームだから中東では争いが多いんですか」。大学で「中東の文化」の講義を受け持つと、毎学期こうした質問に出会います。こうした疑問を前に、私は中東の現実の生活がどういふものかを話します。また、日本での生活で、宗教がどの程度意識されているのかと逆に質問することもあります。それによって、宗教が日常生活を説明する上では必ずしも必要ないかもしれないことを意識してもらいたいです。しかし質問をする学生からすれば、自分の質問に正面から答えてもらえなかったと感じる場合もあるようです。この類の素朴な疑問は、実は宗教教義からも人々の生活の実態からも直接的に答えるのが難しいのです。

こうした答えづらい問題に、平易な言葉で明快な説明で答えてくれるのが、本書、『イスラームってなに？ シリーズ3 イスラームとせかい』です。しかも本来は子ども向けとあってわかりやすい。ページ数も少ないので、前にでてきた説明に戻ることで楽々です。「でも、イスラームは一般的な宗教以上に政治制度や暮らしのすみずみまで規定することで知られているじゃない？ だったら社会の仕組みをイスラームで説明するのもまた一般的なことなのじゃないの？」と思われたみなさま。そうです。よくぞ存じます。ただ、本書はこれまでの一般的なイスラーム社会の説明とは少し異なっています。

そもそも本書は「イスラームってなに？」という4巻セットの第3シリーズです。このシリーズは、一冊一冊違った切り口からイスラームに迫る構成をとり、宗教教義（1巻イスラームのおしえ）、イスラーム教徒の暮らし（2巻イスラームのくらし）、そして時事問題（4巻イスラームのいま）からイスラームが説明されます。第3巻となる本書、『イスラームとせかい』では、いわば、時間軸と地理的の広がりという3Dの立体図面において、イスラームの広がりとその変化が動的に描き出されます。

本書は三部構成をとり、第一部「イスラームのひろがり」では、イスラームが地理的に広がる過程だけでなく、スンナ派とシーア派への分派といった、信仰実践の幅が広がる様子も描かれます。さらにイスラーム法についての説明を通じて、神から授けられたメッセージが、いかにして時を経ながら、その時々

の社会の考えに合わせて後の人々に継承されてきたのかが示されます。第二部「イスラームと他者」では、喜捨、税金、言語（アラビア語）という三つの社会制度に焦点をあて、それらが社会的仕組みとしてムスリム、そして非ムスリムに生きられてきた様子が描かれます。喜捨であれ、税金であれ、言語であれ、ムスリムだけの関心事ではありませんでした。ムスリムと非ムスリムの違いは認識されながらも、それぞれの方法で、人々は社会制度から利益を得ながら暮らしていたのです。第三部「イスラームと世界」では、イスラーム社会と科学、イスラーム社会とヨーロッパ、イスラーム社会と日本というテーマから、イスラームが決して閉じられた世界のできごととして発展してきたのではないことが示されます。

本書の優れた点は、なによりイスラーム社会の、人々の在り方を、宗教的教義に求めるのでも、宗教的教義を人々の慣習に求めるのでもなく、それらが互いに影響を与え合い、また時間の経過や地理的特性などのもとに常に変化してきたものとして描き出しているところにあります。別の言い方をすれば、社会制度としてイスラーム教を見ることで、教義の実践や、暮らしの背景に存在する宗教的倫理観を説明することに成功しています。結果として、魅力に富んだ社会システムとして多様に「生きられる」イスラーム、というストーリーが説得力をもって立ち上がります。興味深いのは、扱われている一つ一つの情報はそれほど新奇なものではなく、むしろ、これまでイスラームへの誤解やステレオタイプをつくってきたようなものである点です。聞き覚えのある情報が提示されるため、本書を読み進めていくことはさほど難しくありません。それなのに、新たな視点でのストーリー展開によって読み切った後の理解として残るのが、否定的に誤解すべくもない、実像を結んだイスラーム社会の姿なのです。

イスラームに関する誤解も広く流通する今だからこそ、ぜひ、本書を通じて、改めてイスラームについての既知の情報を整理し、イスラーム社会を身近に感じる契機とされてはいかがでしょうか。

鳥山純子

(国際平和ミュージアム運営委員 / 国際関係学部准教授)

ここが見どころ

「いのちの^{アトリエ}画室」で 後ろめたさを抱きしめる

竹中悠美

(国際平和ミュージアム展示セクター長
/ 先端総合学術研究科教授)

当館2階の奥に「いのちの^{アトリエ}画室」と名付けられた部屋があります。ここは長野県にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の京都館として作品と資料の一部を展示しています。「無言館」は、夭折の画家たちに特別な思いを抱く窪島誠一郎さんが、戦争で多くの画友を失った画家の野見山暁治さんとともに遺族を訪ね歩いて預かった遺作を展示している私設美術館です。6月の梅雨空の下、森の中にたたずむ「無言館」を訪ね、年に一度遺族が集って語り合う「無言忌」に参加してきました。

ある男性は、父が身籠もっている妻の絵を遺して出征し、母も自分を出産後すぐに亡くなったため両親を知らずに育ったが、野見山さんから父は美術学校で絵のモデルをしていた母と反対を押し切って結婚したことを聞いて、その絵を父と母が生きていた証として見ていると語りました。別の老婦人は、地元の学校への進学を決めていた厳格な父を説き伏せて念願の美術学校に進むことが許された兄が、その恩に報いようと懸命に絵を学んでいた姿を思い起こして話してくれました。

命を半ばにして断たれたのは画学生だけでなく、全ての戦没者がそうです。ただ画学生たちは、画家として絵を描きたい！という志を抱き、そこに向かっていました。遺族も語っていたように、当時、芸術の道を選ぶことは今よりもずっと困難なことで、だからこそ彼らの思いは痛切でした。私たちが夭折した芸術家に憧れや敬意を感じるのは、彼らの才能や個性よりも、若くして人生を賭ける何かを見つけ、そこに向かって一途に駆け抜けた姿にあるのではないのでしょうか。

画学生たちが亡くなった今も、彼らの絵は目の前に在ります。画面に残る筆や指の跡は彼らの身体の刻印であり、幾度もなぞるように引かれた線を息を詰めて見ていると彼らの鼓動が蘇ってくるようです。私たちが絵を見ている位置には、かつてその絵を見据えながら描いていた画学生が立っていたのです。まるで時を超え、鏡のように絵を挟んで彼らと向き合っているようではありませんか。もっと描きたい！もっと生きたい！という声無き響きを「無言館」では多くの人々が感じています。

「いのちの^{アトリエ}画室」にもそれは響いています。そして作品に添

えられた遺族たちのことばが「もっと描かせてやりたかった」という思いを重奏しています。画家への道が許されるのは難しい時代でしたが、画家の息子たちは例外でした。洋画家の曾宮一念も日本画家の小野竹喬も画学生となった息子たちの成長を見守るとともに、より新しく、より自由な日本の絵画を彼らが創出することを待ち望んでいました。戦場で息子を失った画家たちは押し黙ってひたすら絵を描き続けたそうです。曾宮が晩年に漏らした「悔しい」ということばを噛みこころしながら。



曾宮俊一、幼い頃写生する父一念とともに（部分）

「無言忌」で、窪島さんと野見山さんは飄々とユーモアも交えながらこれまでの苦労話を語っていました。けれど、二人は画学生たちに対して後ろめたさを感じていると言うのです。本人の承諾を得ずに作品を展示しているが、未完成の絵や満足していない絵を展示されて本意ではなかろうか。少なくとも彼らは誰一人として戦没者のための美術館で展示されることなど望んでいなかっただろうに。それゆえ、戦争によって命を奪われた彼らの、画家としての命も奪ってしまっているのではないかという後ろめたさがあるというのです。

この後ろめたさは「いのちの画室」で作品を展示している国際平和ミュージアムにもあります。また、画学生たちがしまい込んでいた絵や家族のためだけに描いた絵を見る私たちも感じるかもしれません。けれど、私たちはこの「後ろめたい」気持ちを大事にしなければならないと思います。なぜなら語源とされる「後ろ目痛し」の後ろ目とは、私たちが背後から見つめる目、つまり倫理感や自己批判という私たちの内に備わる力だからです。私たちが今どのように絵を受けとめているか絵の奥から見つめているようなこの目、それはひるがえって、私たちがどう生きるべきか、私たちが生きていくために何を守り、何を声に出していくべきかを考えることを後押ししてくれる力になるはずです。だから、「いのちの画室」で後ろめたさを感じてもらえたなら、その痛みを手放してしまわずにしっかり抱きしめてください。

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018
アソシエテッド・プログラム
2018年度春季特別展

KYOTO
GRAPHIE
international
photography festival

ヤズディの祈りー林典子写真展ー

会 期：2018年4月14日（土）～7月16日（月・祝）
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階・中野記念ホール
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：赤々舎 松本工房 KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社
助 成：公益財団法人 花王芸術・科学財団
作品点数：45点
入館者数：10,313人

フォトジャーナリスト林典子氏による少数民族ヤズディの写真展を開催しました。人口約60～100万人ともいわれるヤズディは、独自の宗教、信仰をもちイラク、イラン、トルコ、シリア周辺の地域を拠点として分散して暮らす少数民族です。2014年8月、イラク西部の山岳地帯がダーシュ（イスラム過激派組織イスラム国・IS）の襲撃を受け、約5000人が殺害、約6000人の女性が性奴隷とされる惨劇にみまわれました。本展は林典子氏がヤズディへの取材を重ねた写真集『ヤズディの祈り』や、その後の調査取材の記録を中心に構成し、聖地シガル山とともにあるヤズディの世界観を再現しました。

ヤズディはISの襲撃から避難し監禁場所から逃れた後も、イラク北西部のシガル山の麓に留まる者、イラクの難民キャンプで暮らす者、故郷を追われドイツやアメリカへ渡った者、いまだ家族がISに囚われている者などそれぞれの事情を抱えています。林氏の写真は、国際問題としてヤズディの悲劇をとらえるだけではなく、かつての日常を彷彿とさせるヤズディのお守りやおもちゃ、思い出のミシン、腕時計など彼らが大切にしている品々にも焦点をあてています。またISの兵士と強制結婚させられ、救出された後ドイツで暮らす女性の日常を切り取った組写真など、写された人物の証言もあわせて解説キャプションとしてとりあげました。ほかにも自らも性暴力に遭い、証言はしつつも、ISに囚われた親族に配慮して顔をさらすことができない女性たちもいます。そうした彼女たちをヤズディの女性が日常的に使う白いベールでカメラをおおって撮影した姿は、白いタペストリーとして天井から展示しました。ヤズディを象徴するような“白い布”とシガル山南麓と北麓の写真に囲まれた空間で、肖像写真と被写体の縁の品、そして各人の言葉を同時に鑑賞することで、来館者が、一人の名前を持った人間の姿を想像できるよう試みました。会場の一角には写真集の読書コーナーを設け、多くの来館者が時間をかけてヤズディの証言と向き合う場となっていました。

離散したヤズディの国際組織であるYAZDAによると、歴史



林典子氏



展示会場の様子



写真集の読書コーナー

上の幾度かの迫害を経て民族存続の危機に瀕している現状を国際社会へ訴えていくようです。人々の暮らしに丁寧に寄り添う作家独自の視点からとらえた作品の数々を通して、日本からは遠い異国の物語としてではなく、現代を生きる一人ひとりにとっての平和について考える契機となったのではないのでしょうか。

なお、本展は KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018 にアソシエテッドプログラム（関連企画）として参加しました。

* KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018
第6回テーマ「UP」(4/14(土)～5/13(日))
京都市内数会場にて、国内外で活躍する作家が参加する国際的な写真祭

■関連企画

オープニングイベント

林典子トーク

登壇者：林典子氏（フォトジャーナリスト）

竹中悠美氏（立命館大学先端総合学術研究科教授）

日時：2018年4月14日（土）13：00～15：00

会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階ロビー

参加者：61名

林典子氏を迎え竹中悠美教授との対談を行いました。ヤズディを取材するに至った経緯や、現在取り組んでいる北朝鮮の被爆者や日本人の妻、そこから展開して北朝鮮に暮らすひとびとの日常を伝えるテーマなどをお話いただきました。

林氏自身もヤズディを当初から知っていたわけではなく、2014年の襲撃後に偶然トルコに滞在した際に耳にした話から興味を持って現地に入り、ある家族を通じてヤズディという集団と関わるようになりました。その過程で過ごした時間と撮りためた写真が、ヤズディたちが大切にしていた思い出の品々と肖像写真と結びつき、証言集で構成される写真集へとつながったそうです。幾度も取材を重ね、イラク、ドイツ、アメリカへと対象を取材していく姿勢は、事件が起きている瞬間だけに注目する従来の報道写真のあり方とは一線を画し、林氏独特の作品を生み出す原動力となっているようです。

一方で竹中教授により、芸術学的側面からみた作品解説がなされました。美術作品と、報道媒体としての写真が絶妙に融合した氏の写真の魅力について、作品の構図、淡い色合いの色彩表現などを例に読み解いていただきました。またSNSなどが発達し、誰もが即座に情報発信できるような時代における報道の役割についても議論がおよびました。時間をかけて物事の輪郭を浮かび上がらせるような報道、情報伝達の形も、今の時代だからこそ求められているのかもしれない。

会場からの質問では、撮影テーマの決め方、取材に臨む姿勢についてなどの質疑応答があり、丹念な取材と試行錯誤を繰り返しながら、問題の深部を追求していく林氏のフォトジャーナリストとしての姿勢も浮き彫りにされました。



林典子氏（左）、竹中悠美教授（右）

■関連企画 講演会

人道支援で出会ったヤズディの人たち

講師：佐藤真紀氏（JIM-NET 事務局長）

日時：2018年6月2日（土）13：30～15：00

会場：立命館大学衣笠キャンパス

平井嘉一郎記念図書館1階カンファレンスルーム

参加者：32名

講師に特定非営利活動法人JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）の事務局長、佐藤真紀氏をお招きしました。JIM-NETはイラクを中心にがんや白血病患者の医療支援を行う医師、団体のネットワークで、2015年にイスラム国から解放された避難民への医療支援をいち早く実施しています。講演に先立ち本学国際関係学部鳥山純子准教授より講師紹介があり、2014年のISによるシニガル山襲撃後、クルド人部隊とアメリカ軍とによるISの一掃作戦などの政治的状況も含めて、イラク北部の都市アルビルでの支援活動で関わったヤズディの人々の様子をお話いただきました。

ヤズディをはじめ難民キャンプでのがん患者の闘病生活



難民キャンプの様子

は、困難な状況下にあるそうです。その中でも支援のためのチョコレート缶のデザインをする女の子たち、小児がんで片腕を失ったサッカー好きのヤズディの少年のために、イラク代表選手と交流の機会を設けたことや、ヤズディが新年を祝う日に卵に色を塗るお祭りに卵を提供したこと、日本のカキ氷機を使って作ったナツメヤシのシロップをかけたカキ氷を、おいしそうに食べる子供たちの姿などが紹介されました。身近な話題を織り交ぜた写真と映像を通じて、私たちと同じ時代を生きるヤズディの暮らしを垣間見ることができました。

近年、クルド人自治区内で戦闘の激化にともない、ISに対抗するための軍事費が拡大したことで、医療分野の予算が圧迫されているといった事情も、薬に費用のかかるがん患者支援にとっては、大きな痛手となっているそうです。残念ながら亡くなってしまいうがん患者も多く、支援活動の難しさと同時に、大きな支援と支援の間をつなぐ橋渡しとしてのNGOの果たす役割について、佐藤氏は実感をこめて語って下さいました。

多くの学生の参加もあり、ヤズディの人々を身近に感じることで林典子氏の写真展についてより深く知り、広い視野でみた国際平和への関心を促すことができました。



佐藤真紀氏

■関連企画 映画上映会

「ラジオ・コバニ」

69分 監督：ラベール・ドスキー 2016年 オランダ

日時：2018年6月19日（火）13：00～14：15

2018年6月21日（木）18：00～19：15

会場：立命館大学衣笠キャンパス充光館 JK001 教室

参加者：計77名

IS（イスラム過激派組織イスラム国）に破壊されたトルコ国境に近いシリア北部に位置し、クルド人の多く暮らす街コバ

ニ。大学生が手作りのラジオ局をはじめ、街を再建して未来を築こうとする人々に希望と連帯感をもたらした姿をとらえたドキュメンタリー映画を上映し、学生や仕事帰りの方などにご参加いただきました。

改めて現代のかかえる戦争について考えたという感想が多くありました。



見学者の感想
アンケートより

過去の写真展で救いようのないつらい場面のオンパレードがありました。今回の林典子さんの写真展は無残な戦闘シーンはなく、かえって静かに何が奪われたのかを伝えてくれるように感じました。スマホでパシャッと伝える瞬間の過剰な情報に慣らされてしまっていた私の目に、この写真と人々の言葉は鮮烈でありました。（60代 自営業 大阪府）

スロージャーナリズムという言葉と、アートのつながりについて会場に入ってすぐの掲示で知ることができ、新しい視点をいただいたような思いで見ることができました。あたり前に続いていくはずだった幸せな日常をうばわれ暴力にさらされている人々のことを静かに訴えてくる写真ばかりでした。（40代 会社員 京都市）

今回初めて特別展を見学しました。テレビなどで知る戦争は一部にすぎず、その他の市民の人々がその後どんな生活をしているのかなどはあまり日常生活では知ることができないものなので、それを展示で少し見ることができたことは、とても大切なことだと思いました。（20代 大学生 京都府）

写真にうつる人々のたたずまい、表情から強いメッセージを感じました。ヤズディのアイデンティティ、家族へのおもい、ひどい暴力や迫害を受けてもなお、故郷をおもう彼らの信念がつきさりました。

メディアの力で彼らに平和を。悲劇の終息を。とても考えさせられる写真ばかりでした。人が人を支配することがあってはならないと思います。そして信仰の自由。人の心を強要することも誰にもできないと思います。今後もこのような写真展があればぜひ来たいです。（30代 会社員 京都市）

世界の現状を知る良い展示でした。携帯電話によって脱出の手がかりを得ているのが現代社会だと感じました。また戦闘員も数か月等経つと携帯電話を使われてしまう油断が生れる点に人間性を感じると同時に戦争の構造の複雑性を感じます。（20代 会社員 京都市）

写真集と展示を拝見しました。難民の問題に関する展示ということしか考えないままホールに足を踏み入れると、静かなまなざしの人々が写真越しにこちらをじっと見つめ、たたずんでいました。説明文には彼ら・彼女らが今もなんとか生きてこうとしている姿勢が表れていたのに、写真の中にある人の表情は静かで、感情がいくつも混じって黒になってしまったかのようにも思えました。写真集の中にも、自らの体験を彼らは淡々と語りありましたが、この「淡々」の中にどれほどの思いがあるのか、私には推しはかることができませんでした。また、そのことにひどく無力感も感じています。「ニュース」として見るのではなく、同じ人間として今も世界に生きている人々の話なのだと思えるべき展示に、大きな衝撃を受けましたが、今はまだ私の中で考える時間が欲しいです。（10代 大学生 京都市）

今まで家族と暮らしてきた思い出がいっぱいの家を突然追い出され、破壊されて、全く馴染みのないコミュニティに移らなければならないというのはとても心苦しいことだと想像できた。（10代 大学生 京都市）

素晴らしい取材の力であるとともにその労力をまったくみせない、ある意味写真家自体の存在を消してしまっていること、またそれにより、より撮影された人々その状況の切実さ、悲劇が、浮き彫りになる。そのすべてに感銘を受けました。こんなことが絶対にあってはならない、そう思わせる素晴らしい展示。ありがとうございました。（40代 建設業 京都市）



生後8ヶ月の息子ピワに母乳を与えるズィーナ © 林典子

ミニ企画展示

第113回

第23回京都ミュージアムロード参加企画 「占領期の京都」

会期：2018年2月10日（土）～3月25日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

京都市内博物館施設連絡協議会

京都市教育委員会

1945年8月、敗戦により戦時体制が解かれると同時に、戦争に関わる証拠隠滅や占領対策がはじまりました。同年9月には京都にも米軍が進駐し、おもに西日本の占領拠点とされました。本展では、占領下の京都の街や人々の暮らしについて、ミュージアムや立命館史資料センター所蔵資料、当時日本にいた外国人が撮影したフィルムやプリントをデジタル化した画像（個人蔵）を通して改めて考える展示となりました。

占領下での製造を示す「Occupied Japan」の刻印がある皿、情報統制の事実が分かる検閲印付きの郵便、接收された建物や家屋が図示された地図、物資不足の中で盛んだった闇市の再現などの実物資料に加えて、占領期の京都の様子が写された画像を併せてみることで当時の様子をより鮮明に提示することができました。また、体験者の証言や大学の文集、雑誌からは、くらしを営む人々の目線で占領期の京都を映し出すことをねらいました。

当時を知る来館者からは、子どもの頃の体験や街の様子、米軍兵士との触れ合いについて幼少時代を思い出したといった感想が寄せられ、見学した学生からは、1952年の日本主権回復後、京都の占領軍の施設が沖縄へ移されたことから、現在の米軍基地問題に言及する感想もみられました。

本展開催にあたっては、インターネットなどを通じて写真蒐集をする方に資料出品と画像提供をいただきました。また、古地図をはじめ歴史資料の蒐集家として知られた大塚隆氏（故人）の館蔵コレクションから米軍の衛生隊が利用した調査地図が初出品されました。



第114回

「熟覧Ⅲーメディア資料室への誘いー」

会期：2018年4月1日（日）～4月22日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

本展は2016年、2017年に続き、国際平和メディア資料室（以下、メディア資料室）を紹介する企画の第3弾として開催しました。タイトルの「熟覧」とは、博物館や図書館などの閲覧室で資料を丹念に詳しくみることで、メディア資料室のことをより深く知って欲しいとの思いが込められています。今回はミュージアムで活躍する学生スタッフによる書籍紹介を中心に、周辺資料や関連写真などを併せて展示することで資料熟覧の魅力を伝える内容となりました。

メディア資料室は、ミュージアムの1階にある図書資料室です。ミュージアム開館時間に準じて開室しており、どなたでも無料で利用することが出来ます。現在、47,000点の図書・雑誌資料・AV資料を所蔵しており、児童書や日本近現代史の概説書をはじめ、調査・研究向けの専門書、戦時中の国策雑誌や紙芝居、戦争の体験をつづった手記など一般の図書館にはない書籍も揃えています。また、2018年度より新たに戦争や平和をテーマとした漫画コーナーを設置し、手塚治虫作品から最近の話題作まで幅広く収集しております。

平和創造に向けた学びの場として、メディア資料室をより多くの方に活用していただきたいと考えています。

【紹介された書籍（一部）】

舞鶴市役所編『引揚港舞鶴の記録』（2000年）

アート・スピーゲルマン著『マウス：アウシュヴィッツを生きのびた父親の物語』（晶文社、1994年）

山本昭宏著『核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』（中央公論新社、2015年）

村尾孝著『萱草の花野の果てに』（京都ライトハウス、2012年）



ミニ企画展示

第115回

「私のレンズを通して見た、占領下のパレスチナ」

会期：2018年4月28日（土）～5月20日（日）

主催：特定非営利活動法人アースキャラバン

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

本展は、パレスチナ西岸地区ビリン村の住人で、パレスチナの状況を写真と映像で記録し続けているハイサム・ハーティブ氏の日本初の展覧会でした。国籍・人種・宗教の違いを乗り越え、戦争をなくす誓いを世界規模で発信する活動を行うNPO法人アースキャラバンが、今パレスチナで起こっていることを当事者の目線で伝えたいと主催しました。

展示された写真には、何気ない暮らしの風景や大切に育てているオリーブの収穫など穏やかな営みの一方で、イスラエル兵からゴム弾や催涙ガス弾で狙われるデモ参加者の姿、一方的に作られた分離壁、夜間に突然襲撃される民家の様子などパレスチナの現状が写し出されていました。このような小さな衝突や

個別の出来事は日本のメディアで報道されることはありません。

展示を通して、イスラエルとの争いで日常的に苦しめられているパレスチナの人々と、こうした悲惨な現状を世界に伝えたいと危険を冒して撮影を行い、SNSなどでの配信を続けるハーティブ氏の存在を知り、パレスチナ問題解決のために何が出来るのかを改めて考えるきっかけとなりました。



2018年度前期 NGO ワークショップ開催報告

「世界の子どもたちにとっての平和とは？」

日時：2018年6月29日（金）18:00～19:30

場所：立命館大学国際平和ミュージアム 2F 会議室

講師：加藤真希氏

（日本国際ボランティアセンター(JVC)アフガニスタン担当）

国際平和ミュージアムでは平和教育普及活動の一環として、外部より講師を招き、ミュージアムで活動する学生スタッフの企画によるワークショップを開催しています。ワークショップを開催するにあたって、企画メンバーが中心となり、テーマ設定から講師依頼、ワークショップに参加する人を募る広報活動、当日の企画運営などを行いました。

当日は約40名の学部生・大学院生が参加し、講師の加藤氏より、報道されないアフガニスタンの現実があるといった説明とともに、外の椅子も机もない場所で大学受験を行っていたり、学校はあっても校舎がなく軍による誤射の被害が起こっていたり、親の復讐のため将来は兵士になると話した少年たちの子どもらしからぬ表情をしているといった、アフガニスタンの実態についてレクチャーを受けました。特に子どもたちの教育環境について写真や映像を交えた説明があり、日本国際ボラン

ティアセンター（JVC）のアフガニスタンでの活動紹介および、現地からの声を聞くことで、まずは現状を知ること、自分に何が出来るのかを考え続けていくことを学びました。講師の加藤氏からレクチャーを受けた後、グループに分かれて、アフガニスタンの人たちのために何が出来るのかを考え、それをメッセージビデオとして作成しました。参加者からは「アフガニスタンでは『平和』が常識ではなく、『暴力』での解決が当たり前になっていることに驚いた」「他国で起きている問題は、どうしても『他人事』として捉えてしまう。これからは、『自分事』として捉えられるように意識を変えていきたい」という感想が聞かれました。



グループワークの様子

—留学生ボランティア活動報告—

近年、国際平和ミュージアムでは、日本近現代史や戦争の記憶に関するテーマを学ぶ留学生をボランティアやインターンとして断続的に受け入れています。2015年にはドイツ語のチラシ制作、2016年にはシンガポールの資料調査、2017年には中国語のチラシ制作と学生ミュージアムスタッフの紹介映像制作が、彼ら留学生ボランティアの手で行われました。

そして昨年度は、2018年1月から3月の間、国際関係研究科博士課程前期課程の Matthew Walker さんが当館でボランティアとして活躍しました。ここでは、その主な業務を紹介します。

1. ミニ企画展示「占領期の京都」資料調査

この展示には、戦後、占領軍として京都に駐留した 3461st Ordinance Medium Automotive Maintenance Company のアルバム（本学史料センター所蔵）が出品されていましたが、その中に部隊員 112 名の住所の記載がありました。そこで学芸員の要請を受け、現在でも送付可能な宛先を調査し、32 件にむけて京都進駐時の写真や資料などの照会依頼の手紙を送る作業を Walker さんが担いました。70 年近くの歳月が流れ、当時の住所から辿ることは不可能に思えましたが、手紙を送ったうち、2 名の方の関係者から連絡をいただくことができました。1 名はご遺族、そして、もう 1 名は現在もご存命の方のご家族からの連絡でした。

2. 常設展示町屋の資料紹介の英語版制作

地階常設展示の中にある町屋の復元の中には、一五年戦争当時の生活の中の資料を当時の体験とともに紹介した「めくり」資料があります。「火たたき」や「灯火管制」など、当時の日本の生活様式と総力戦体制に関わる資料の説明です。今回、Walker さんはこの資料の英語版を制作しました。

指導を担当した学芸員の兼清によれば「日本人学生でもあまり馴染みの無い資料や事柄を積極的に調べて、英語で表現する上での細かいニュアンスの調整にも積極的に意見を出して対応をしてくれました。例えば、隣組組長の訳は head、leader、chief のどれがふさわしいかなど、細かいニュアンスまで一緒に検討しました」とのことです。

ボランティア活動をして

私は立命館大学大学院国際関係研究科の学生として、第二次世界大戦の記憶に関する日本のミュージアムの役割と、日本と他のアジアの文化との間の歴史的な問題を研究しているので、立命館大学国際平和ミュージアムでのボランティア活動に興味を持ちました。今年の1月、最初に立命館大学国際平和ミュージアムに行った時は、京都が第二次世界大戦の影響を受けたことがあまり分かりませんでした。アメリカでは子供のころから、戦争中に京都は戦災から救われたとよく聞いてました。ボランティアとして、戦後のアメリカ軍による京都の占領についても多くのことを学びました。

最初は日本語を英語に翻訳するのが難しく、大変でした。しかし、ボランティア活動のおかげでだんだん慣れてきました。例えば、ミュージアムの地階にある町屋の解説シートを英訳した時、漢字と文法は古かったし、ページは 10 枚あったし、とても難しかったです。町屋のことを英訳したことで、京都の戦時下の生活が分かってきました。また新しい展覧会のため、京都を占領したアメリカ軍の兵士たちと家族を見つけて、手紙を書いて送りました。

4 月から、学生ミュージアムスタッフとして、英訳の仕事を続けています。また、これから、研究のために立命館大学国際平和ミュージアムと日本の他のミュージアムとを比較したいと思います。学生スタッフとして一生懸命頑張りたいと思います。

2018 年度は、Walker さんは、学生ミュージアムスタッフとして活動しています。



作業する Matthew Walker さん

「平和とは」をテーマに 平和講話をして

谷川佳子

(国際平和ミュージアム ボランティアガイド)

ボランティアガイドは、常設展示の解説以外にも学校団体から要望があると短い「平和講話」をします。従来は戦争体験談が望まれましたが、最近は広島や沖縄への修学旅行予習、「幅広く平和とは」といった内容が求められるようになり、戦争体験のないガイドも工夫して講話に臨んでいます。

昨年度、私は小学6年生、中学2年生、高校2年生の3つの団体に「自分の平和と世界の平和」と題してオリジナルのまんが、国際交流活動の写真を使って語り掛けました。キーワードは「自分と関係ある」「平和は対話・対話は平和」です。

西宮市の小学生には西宮空襲や広島原爆投下についての学習経験、阪神淡路大震災の被災地である神戸市の中学生には天災と戦争の類似点と相違点、北海道旭川市の高校生には日本と海外のつながりに焦点を置きました。どのグループも近年頻発しているテロ事件、こどもや若者の自殺についてニュースで知っており、まんがのストーリーや写真を見て、真剣に感じ考え、思いを表現していました。

小学生からは「友達が泣いているのを知っていたけどスルーしたことがあった。だいじょうぶ?と聞いてあげたらよかった」、中学校の先生からは「学校で大震災の継承に取り組んでいるので役立った」、高校の先生からは「絵解きでわかりやすかった」との感想をいただきました。「戦争・暴力・和解・平和」は他人事ではないこと、解決には対話が大事であることを理解してもらえたようでした。

21世紀に生まれたこどもたちの日常の生活体験とミュージアムのメッセージとがつながるように、これからも私達ボランティアガイドは来館者の望みに応え、いい講話をしていきたいと思えます。



2017年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2017度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。お名前を記し、感謝の意を表します（敬称略・50音順）。

資料

秋山幾太郎
秋山 恭子
石川 文洋
市原 公子
印藤 孝
太田 啓子
大塚 和子

岡尾 恵市
奥田 早苗
片岡 義男
北川 常男
京都府学連再建50年記念の
つどい実行委員会
佐々木寿一

島野由利子
多田 彦士
常俊 明子
中川 和子
中村 勝茂
西浦 照夫
長谷川澄夫

畠山 幸子
浜田 一恵
三上 博規
南 満由美
元山富士男
和田 弘

図書

浅妻南海江
伊藤 昭
太田 啓子
岡尾 恵一
笠間 悟
倉本 頼一
櫻澤 誠

塩月 彩子
白川 淑
多田 彦士
玉城裕美子
徳田 房子
富井 恭二
西川 澄子

波多野隆一郎
坂東 弘美
平井 紀子
藤岡 惇
藤田 明史
藤原 栄一
宮脇 弘幸

本村 廣司
森 亜紀子
山崎たみ子
Raja Shehadeh
団体 50団体

※掲載の許可をいただいた資料寄贈者（個人、団体）、図書寄贈者（個人）のお名前を掲載いたしました。

入館者状況（2017年4月～2018年3月）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	25	25	26	26	26	19	27	24	20	23	24	26	291
入館者数	2,102	3,961	4,240	2,936	2,628	2,474	10,818	6,845	3,029	964	1,471	1,893	43,361
累計（開館当初からの入館者数）													1,069,288
特別展	4/15～7/9	春季特別展 KYOTOGRAFIE アソシエイテッドプログラム「DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」											9,791
	9/21～11/12	特別展「世界報道写真展 2017 - WORLD PRESS PHOTO 17-」											
	9/21～10/1	滋賀会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命 21 エポックホール											991
	10/3～10/27	京都会場：立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール											8,776
	11/1～12/23	秋季特別展「儀間比呂志版画展 - 沖繩への思い -」											9,121
ミニ企画展示	4/1～5/28	第107回「熟覧II-メディア資料室の誘い-」											-
	6/1～6/30	第108回「ミュージアム・この1てん『もうたくさんだ』」											-
	7/8～8/27	第109回「ミュージアム25周年記念 特別展ポスターコレクション 1992-2017 ポスターでたどるミュージアム25年の軌跡」											-
	9/12～10/4	第110回「京都の伝統産業と戦争 - 陶磁器の活用をめぐる -」											-
	10/8～12/16	第111回「第11回立命館附属校平和教育実践展示」											-
	1/13～1/28	第112回「原発設置をめぐる住民投票実現までの軌跡」											-
	2/10～3/25	第113回「占領期の京都」（第23回京都ミュージアムロード参加企画）											-
講演会ほか	5/4	春季特別展「DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」関連企画 ・映画上映会&講演会「広河隆一 人間の戦場」 講師：広河隆一氏（フォトジャーナリスト） 充光館 301 教室											198
	6/29	・映画上映会「ザ・トゥルー・コスト」 充光館 301 教室											72
	5/13	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第3回ワークショップ「原爆体験の伝承」											12
	6/14	NGO ワークショップ「難民 国内避難民×イラク～JVC と現地 NGO インサーンのイラク中北部キルクーク市での取り組みについて～」 講師：池田末樹氏（日本国際ボランティアセンター（JVC）イラク事業担当）											32
	6/23	メディア資料研究会 第5回「西脇家資料一家族史・女性史として」											11
	7/23	夏休み親子企画『「へいわ」ってなに？～今、わたしにできること～』											21
	7/25～	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会（6日間・7/25、7/26、7/27、8/23、8/24、8/25）											75
	8/1～8/6	平成29年茨木市非核平和展 - 戦争で命を奪われた動物たち -（協力）/ 茨木市立中央図書館											オープン
	8/1～8/6	第37回平和のための京都の戦争展（会場） 立命館土曜講座											2,660
	8/5	・戦争と社会正義-昨今の軍事的緊張・難民・人権問題に法はどのように対応するのか？経済社会協力による平和達成への道のり 講師：吾郷真一氏（立命館大学法学部教授）/ 末川記念会館											207
	8/26	・「マンガ」と「平和」を展示する マンガミュージアム・平和ミュージアムそれぞれの展示経験をふまえ、戦争マンガや平和に関する展示について、実感や課題を語り合う 講師：吉村和真氏（京都精華大学国際マンガ研究センター教授・副学長） 田中聡氏（立命館大学文学部教授・国際平和ミュージアム副館長）/ 末川記念会館											144
	8/8	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第4回ワークショップ "Remembering the Saved City: Kyoto, the Atomic Bomb, and the Nuclear Taboo"											11
	9/10	第50回原爆忌全国俳句大会（後援）											70
	10/5	特別展「世界報道写真展 2017 - WORLD PRESS PHOTO 17-」関連企画 ・講演会「なぜフォトジャーナリストは現場に向うのか：南スーダン難民は今」 講師：川畑嘉文氏（フォトジャーナリスト）対談：岩田拓夫氏（立命館大学国際関係学部准教授）/ 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム											50
	10/14	「竹中真ジャズピアノコンサート-変えられた運命」演奏者：竹中真氏（ピアニスト、作曲家）											111
	11/3	秋季特別展「儀間比呂志版画展 - 沖繩への思い -」関連企画 ・三線演奏会「南洋諸島で響いた三線の音」演奏者：栗山新也氏（日本学術振興会特別研究員・国際日本文化研究センター外来研究員）											78
	11/22	・映画上映会&監督座談会「アヒラのうた-オキナワからの証言」 講師：朴壽南氏（映画監督） 対談：庵途由香氏（立命館大学文学部教授）/ 平井嘉一郎記念図書館シアタールーム											24
	12/2	・平和教育研究センター公開シンポジウム「沖繩戦の後を生きる」 パネリスト：富山一郎氏（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授）謝花直美氏（沖繩タイムス編集委員） 森重紀子氏（同志社大学 日本学術振興会特別研究員） 司会：番匠健一氏（立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー）/ 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム											54
	11/15	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第5回ワークショップ「戦争の記憶を紡ぐ-写真メディアの可能性」											15
	12/6	京都・欧州人権セミナープロジェクト 第1回平和人権連続講演会「ジョン・コルトレーンと平和人権」 講師：藤岡靖洋氏（ジョン・コルトレーン研究家、『コルトレーン・ホーム』保存役員）/ 創思館カンファレンスルーム											114
	12/7	京都・欧州人権セミナープロジェクト 第2回平和人権連続講演会「ドイツ・ヨーロッパにおける難民問題」 講師：Dr. Werner Köhler（大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事）/ 学術館 401 号											70
	12/9	第16回平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会 平和教育研究センター特別講演会「ダークツーリズムとミュージアム-戦争と平和を考える-」 講師：井出明氏（追手門大学経営学部マーケティング学科准教授）											56
	12/10～	The Nobel Peace Prize Exhibition 2017 "Ban the Bomb" 国際平和ミュージアム収蔵資料の展示 / ノーベル平和センター、ノルウェー											オープン
	12/16	メディア資料研究会 第6回「人びとと原子力-立命館大学共生社会研究センター所蔵資料から-」											11
	1/11	後期 NGO ワークショップ「チョコレート×フェアトレード～カカオ生産の裏側にある児童労働を考えよう～」 講師：秋吉恵氏（立命館大学共通教育機構准教授）											23
	1/18	京都・欧州人権セミナープロジェクト 第3回平和人権連続講演会 "Global Constitutionalism and Human Rights" 講師：Prof. Mattias Kumm (NYU) / 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム											25
	1/20	メディア資料研究会 第7回「民間人空襲被災者の補償問題の戦後史～福島啓氏氏旧蔵の名古屋空襲訴訟の裁判資料から～」 講師：植野真澄氏（東京大空襲・戦災資料センター）											13
	1/27	映画上映会《SHOAH ショアー》（後援）/ 立命館大学朱雀キャンパス											225
	3/10	映画上映会&監督トーク「奪われた村 避難5年目の館館村民」講師：豊田直己氏（映画監督）/ 充光館 301 教室											70
	3/17	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第6回ワークショップ/メディア資料研究会 第8回「戦争体験のない世代による戦争体験継承～京都における空襲に関わる二つの事例報告」											20
	3/24	渡部陽一（戦場カメラマン）平和講演会「世界からのメッセージ 平和と命の大切さ」（会場）											

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

今年度の前半期の「春季特別展 ヤズディの祈り-林典子写真展-」、ミニ企画展示「私のレンズを通して見た、占領下のパレスチナ」は、それぞれ惨劇に見舞われた、また占領下での日常生活の写真を通して「平和」を考えさせられる企画でした。静かな表情の被写体が雄弁に語りかけてきます。同じ事を感じたのが長野県上田市にある「無言館」の絵でした。絵筆を置き戦場に行かざるを得なかった若い画家達の無念、残された家族の悲しみが伝わってきました。写真や絵は後世に多くのことを伝えてくれますが、写真や絵で何も伝えることができずに奪われた多くの命にも思いを致しました（編集局）。

INFORMATION

ミニ企画展示室

第117回

「外山重男ーある兵士の日常Ⅱ」

会期：2018年7月14日（土）～8月26日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

協力：嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学、京都・大学ミュージアム連携

内容：日中戦争に従軍した外山重男氏が、異国の風景や人々の営み、日本軍占領下の光景などスケッチし、戦地から日本の家族の元へ送った軍事郵便はがきを中心に展示します。これらのはがきには、外山氏がひとりの人間としてどのように戦争に向き合ってきたのかが記し残されています。



敵情を監視する兵士（1938年）

第118回

「原発とたたかうトルコの人々： 日本の原発輸出、現地の声は」

会期：2018年9月11日（火）～9月30日（日）

主催：森山拓也（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士課程（後期課程））

内容：日本が原発輸出を計画するトルコはチェルノブイリ原発事故の汚染被害も経験しており、反原発運動が40年以上続いています。反原発運動の様子や現地の声を、おもに写真で紹介いたします。



チェルノブイリ30周年のシノップ反核集会で踊る参加者ら（森山拓也撮影）

2018年度秋季特別展「8月6日」

平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築プロジェクト成果展示

会期：2018年11月6日（火）～12月16日（日）

11月17日・18日は関西文化の日のため無料公開

開館時間：9：30～16：30（入館は16：00まで）

休館日：月曜日、11月24日（土）

会場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階中野記念ホール

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

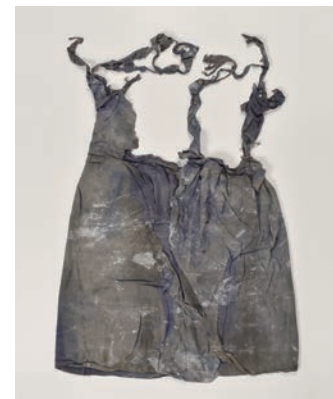
後援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都

朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社（いずれも予定）

助成：日本学術振興会 科学研究費助成事業 16K12814

科研費
KAKENHI



被爆したワンピース

開催趣旨

戦後73年が経ち戦争体験者が減少する中、体験継承の重要性が唱えられています。本展では、“8月6日”をテーマにしたふたつの展示から、博物館はどのように戦争体験にアプローチできるのかを考えます。

2015年8月6日の広島平和記念公園の1日を17地点で撮影し、17台のモニターに映し出すインスタレーション作品『レプリカ交響曲《広島平和記念公園8月6日》』（土屋大輔&ビジュアル・エスノグラフィ・プロジェクト）は、戦争体験継承の多様性、多層性を表します。

1945年広島で被爆し亡くなった木村愛子さん（当時14歳）のワンピースを中心とした「8月6日のワンピース」は、73年間をさかのぼりながら愛子さんの体験した8月6日に迫ることを試みます。

ふたつの“8月6日”を通じて、来館者が主体的に戦争体験を想像し反芻する行為を促すことに、博物館における戦争体験継承のひとつの可能性を示します。

立命館大学国際平和ミュージアム日より

第26巻第1号（通巻74号）2018年8月3日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<http://www.ritsumeit.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館会議
JAPANESE ASSOCIATION OF PEACE MUSEUMS AND PIA